現代行動科学会誌　第38号，78－80（2022）

【フォーラム―現場から問いかける―】

知らないことに気がつくことは難しい
―共通認識以外の何か―

八重樫 大周（岩手県立中央病院）

Ⅰ　気がつけば、医療現場で働いていた

「いや、お前なんで病院で働いてんの!？」

そんなこと自分だって思っている。教育学部で教育実習を行っていた私を知る友人・知人は久しぶりに会うと冒頭のごとき驚きを投げかけることがある。心理職を志し、教育現場で働くことを念頭に置いていた私は、目を覚ますと、ふと意識を取り戻すと、正気に戻ると、はっと我に返ると、気がつけば、医療現場で働いていた。しかも、総合病院という現場で。世間的にはそんなに珍しいもモノでもない進路なのかもしれないが、自分にとってはまぁまぁ驚くべきことで、大学１年生の自分に「将来こうなっていますよ」と伝えても絶対信じないだろう。だって、精神科病院ならいざ知らず、学部１年で総合病院に心理職がいるなんて想像できなかったし知りもしなかったのだから。

Ⅱ　急性高機能センター病院に勤める心理職

前置きは少し長くなったが、ほどほどにして今回の話の舞台である「岩手県立中央病院(以下、中央病院)」についてぽつぽつ説明していこうと思う。中央病院は「急性高機能センター病院として先進・高度・特殊医療機能と臨床研修病院としての教育・研修機能、医療情報機能など、県立病院の中心的役割を担う」病院である(岩手県立中央病院,2022)。岩手県には県立病院はいくつもあるが、その中でも大きい病院であり、29 もの診療科を抱え、多くの救急患者を受け入れている。このように、聞くだけで忙しそうな、スタッフも患者もめまぐるしく飛び交う病院の中で、私は公認心理師/臨床心理士(以下、心理師)として働いている。

関わり合いになる診療科については細かい業務もあるため、すべては把握していないが、覚えているだけでも精神科、小児科、脳神経外科、産婦人科、ペインクリニック科、腎臓リウマチ科などの診療科に関わっている。そのほかにも緩和ケアや認知ケア、スタッフのメンタルヘルス支援なども業務に含まれている。病院に勤める立場ではあるが、患者だけではなくスタッフも援助の対象になる職種というのは病院内でも少し変わった立ち位置だなと思う。

Ⅲ　周産期医療で援助を行う男性心理師

前述したように、スタッフ支援もする立ち位置のため、COVID-19 に対応するスタッフのメンタルヘルス相談を行ったりすることもある。しかし、今はそれよりも産婦人科で関わっている周産期対応が目新しくて興味深い。中央病院では飛び込みで入院する妊婦さんが多く(これまで他の産婦人科を受けていなかったわけではなく、切迫早産や帝王切開が緊急で必要になるケースなども)、入院される本人・家族たちはただでさえ大変な妊娠・出産に心情穏やかでない。そんな出産前後を過ごす方々を支えるチームに心理師も介入している。何でもかんでも関わる訳ではないが、やんわりと心理師が関わる方々の範囲を示すと新生児集中治療室(NICU)を利用する妊産婦・家族、周産期における気分の問題や育児不安を抱える妊産婦・家族らへんが支援対象になる。

支援する・介入すると偉そうなことを言っておいてなんだが、実のところ私は子育ても出産も妊娠もしたことがないし、それらに間近で寄り添った経験もない。ないないづくしで、しかも男性だという理由で気が引ける部分も無くはない。中央病院には他にも様々な経験ある女性の心理師だっているし、自分がわざわざ醜態さらして出向く意味も無いのかもしれない。産婦人科病棟だって患者もスタッフも女性しかおらず、自分が入っていくのも憚られる。なぜこんなことをしているのか、楽しくない。と、言い訳めいて陰鬱な感情が延々と垂れ流される。しかし、そうは言っても、実際には経験なんてなくても援助は行えるし、妊産婦さんたちが抱えている問題は違えどそれは普段の患者対応もそうだし、なんならいつもやっている心理介入がフィットすることもある。また、周産期というどうしても女性メインになりやすい場面で、父親になる人たちに焦点を当てるのもなかなか面白い。私自身が経験したことが無いものなので、父親たちがどうやっているのか・何を手伝ってほしいのか・何を困るのかを興味深く聞かせてもらえる。自分が知らないからこそ、親になる人々のびっくりを聞けたり、世間では普通のことに対して家族と心理師でブーブー言ったりも出来る。それを通じて、家族が少し元気になる姿を見ると、「あれー？意外と役に立ってんのかー？」とたまに思える。なぜこんなことをやってこなかったのか、これは楽しい。なじむまでは難しいかもしれないが、新しい分野でただの無知を徐々に無知の姿勢にしながらはやっていくことはたぶんどの分野も一緒だし、男女関係なく心理師が周産期に参入できるのではないかと思う。

Ⅳ　共通認識の外にあるモノへの気づき

総合病院で働くと新しい分野への煌びやかさがある。一方、家族関係が破綻しかけるほどの精神症状、大きい手術による不安感、発達の特徴による学校適応の難しさ、高いリスクを抱えて挑む出産、自殺企図への緊急対応、認知機能の混乱による治療継続の大変さ、病気や痛み・苦しみを抱えることへの悲嘆などなどセンセーショナルな内容に注目も人員も体力

も精神も持って行かれることを痛感する。ただ、こんな荒波の中で頑張り続けることがしんどくなるのはどの患者もスタッフも一緒で、なんか疲れる、楽になりたい、違う視点ない？とそんなふとしたときに役立つのが心理師なのかなとも思う。自分がやれていることは治療の中で見たら些細な部分だったり、病院の中では必要でなく重視されないような部分のこともある。しかし、そんな部分は触れれば意外と患者にもスタッフにも大事なモノだったりする。だからこそ、大きい舞台で起こる注目度の高いモノへの視線以外にわき道へ逸れるような勇気も時には必要なのではないだろうか。

様々な職域・分野でも共通認識の外にあるモノへの気づきや理解が難しいことは多くある。そのような中で、心理師として、「このようなことがあるらしい、あるのではないか」と、患者・クライエントから聴いた・感じたことを提供することは共通認識外の「何か」があるらしいと認識される一助にはなる可能性がある。どんどん自信が無いような書き方になってきて雲行きが怪しくなってきたが、医療現場の中で見えていないモノが心理師であるがために見えてしまう立場にせっかくあるのだ。だからこそ、その立場を利用してスタッフに対しても患者さんに対しても知らないことってあるみたいですよ、とコソッと役立つ者になれればいいなぁと思うがどうなんですかね。

【引用】

岩手県立中央病院，2022「岩手県立中央病院の特色」岩手県立中央病院ホームページ（2022年6月24日閲覧, https://chuo-hp.jp/about/about4/）